越路太夫の放漫生活

紅紫園主人

◎破門に遭ふこと二十八回

藝人で身持のよいのは少ないもの、生來律義な眞面目な者でも四圍の誘惑が多いので、イヤでも墮落するのだが、越路の如きは生來道樂が強いので、一度遊びの味を覺えてからは止度なくはまり込んだ。初めの内は暇さへあれば色廓に通ふといふのであつたが、夫が次第に嵩じて、果は暇があらうがあるまいが、大切な勤務時間――假へ令ば師匠の家の仕事を手傳ふとか、又は大切な命令を受けて使ひに行くとか、是非勤めねばならぬ仕事があつても、夫を放たらかして女の許にズボリ込み、今日も明日もと師匠の家へは顔出しをせぬことが多くなつた。それで師匠も機嫌がわるい。けれども感心なことには幾ら熱くなつてゐる女の所にズボつてゐても、自分の役の時間が來ると屹度樂屋へ遣つて來て、持役を外したことがない。師匠の床へ出てゐる時も、必らず駈けつけて床の後方に聽いてゐる。朱筆を持て稽古本に章を入れてゐる。これには師匠の大據も微笑をもらし『常子は仕方のない道樂者だが、藝にかけては感心な處がある。憎まうと思ふても憎まれぬ』といふてゐた。

併し色氣がついて女狂ひを始めてからは、彼のズボラは止度がない。叱つても諫めても糠に釘、大據も持餘して遂に破門といふ脅嚇をかけたが、夫でも放埒はやまない。やまない所か、彌募る一方である。温厚篤實、寛仁大度の大據も、他の門弟へのみせしめ、世間への義理としても默つてはゐられず、已れ又不埒をひろいだかと涙を揮つて馬稷を斬つた事も幾度といふ數を知らず。それでも越路は毫しも師匠の苦心を察せず、破門に遭ふ毎に師匠の最贔先で自分

も知遇を賜はる所の磯野小右衛門、秋月清十郎、田中市兵衛、土居通夫などいふ當時の天狗黨の紳商達へ泣ついて、師匠へお詫をしてもらふ。さうすると師匠は幾ら怒つてゐても、歴々のお顔にめんじて、イヤとはいへぬ。其上根が憎いとは思はぬ最愛の弟子、むしろ挨拶人のあるを潮にして、勘當を許すといつた樣な調子であつた。越路も此の呼吸を呑込んで、旦那方へ賴みさへすればいつでもお詫は叶ふものと高を括り、又しても〳〵懲りずまに不埒を重ねる常習犯、然も其れが常子時代から佐野太夫（師匠の越路といふ名にかたどり、同じ雪に緣ある地名をとつたもの）となつた後までも引つゞき、前後合せて二十八回も破門せられ、恐らく世界的破門回數のレコードであらうといはれた。

◎巡査を欺むく謔八百

處が餘り度々破門せられたので、後には師匠への挨拶を賴みに行く所が、大阪中にはなくなつた。サア困つたと腕組の結果、京都や名古屋の最貧先まで交る〳〵引張出しては挨拶をして貰つたといふ、實に横着な遣り方である。併し其の失策たるや、いつも女の爲めである。盗みをしたとか、師匠の物をくすねたとか、人をたばかつたとかいふ罪惡ではない、誠に罪のない失策が多いのだ。其上越路は自から謀つて女の身の皮を剝いだことがない。藝妓やおやまに身揚りをさせたことも至つて少ない。いつも自分の方から惚くなつて金をとられることが多いのだ。そんな工合で、誰に聞かしても吹出して笑はれることが多い滑稽じみた失策である。それで最貧先でも憎いと思つて叱る人は一人もなかつたさうだ。それでも南地の或る藝妓と深間になつた時には、餘り師匠を踏みつけたことをしたので、さしもの大掾も火の樣になつて怒り、窮屈な想ひをさせたら直らうかと破門の上中之嶋一丁目（今の日本銀行支店のある所）の土居通夫氏の許へ預かつてもらつた。これは越路が佐野太夫といふた廿八歳の時、即ち明治廿五年の事である。そこで土居家では從來の如く藝人としては扱はず、家規に則り、紺飛白の着物に小倉の袴をはかせ、純然たる女關番として待遇した。そして土居翁は親身も及ばぬ意見を加へ『今度改心しなかつたら俺の顔が潰れ

る。だから太刀にかけても改心させるのだ』と言渡し、容易に外出を許さず下僕同様に召使ひ、庭を掃かせ、味噌を摺らせ、時によつては澤庵石を上げさせる事もある。其代り唯窮屈にする許りではいけまいと世故に熟したみな子夫人や、かしづきの誰彼が、相手になつて無聊を慰さめてやつたが、何事も三指式の家風ゆゑ、下司に育つた越路の肌には合ない。迚も窮屈で堪まらない。

其頃越路は南地の藝妓某に深くなつてゐたが、まだ師匠大掾の家にゐる時分（當時大掾の家は内北濱五丁目、今の旗亭鶴家の東隣にあつた）師匠の家を拔出して女に逢ひに行かうと思つて、二階から電信柱を傳ふて、裸足で往來へ飛降り、交番所の前を通つたのを巡査に見咎められた所から、當座逃れの出鱈目に『唯今師匠越路太夫（大掾の前名）の内へ泥棒が這入りましたから、訴へに參つたので』と嘘をついた。巡査は之に欺されて、急ぎ大掾方へ駈つけて見ると、何事もないので、二度吃驚で元の處へ戻つて見ると、越路は早や其場にゐなかつた。夫が爲め大掾方はしたゝか警察から叱られたといふ椿事もあつた。

かゝる大膽な嘘をいつて警官を欺むくほどのしれものゆゑ、土居翁も大掾から預かるに當つて『私が預かつて訓戒しても、鉛を銀にする事は出來まいが、鉛の曲つたのを矯直す位の事は出來るかも知れぬ。が何しろ難物だからアテにはしてくれな』と斷つたのだ。そして又大掾が持餘して土居家へ預ける樣になつたのも前記巡査欺しの一件なので、大掾が恐怖を感じたのも一原因である。

そこで初めの内は、窮屈でノ〳〵堪らなかつたが、追々馴れぬに連れて地金の自墮落を始め、主人の前では眞面目でゐるが、夜間寐る時間になつて『皆さんお休みなさい』と挨拶して二階の寐間へ往つた振をしては、窃と脱け出して色女の所へ行くことも度々であつた。或る時夜半に火事があつて土居翁が越路の寐間を通つて物干の火見臺へ行くと、寐てゐる筈の越路が居ない。夜具も綺麗に疊んだまゝ置いてある。ハヽア偖は遊びに行きをつたなと悟つても知らぬ振翌日越路が何喰はぬ顏で、窃と歸つて庭の掃除をしてゐる處へ行き『お前も全く改心して眞面目になつたと見え、朝も夜の明けぬうちから起きて蒲團を疊ん

でゐるな』と皮肉をいはれ、然もそこには物堅い夫人もゐられたので、流石の越路も度肝をぬかれ『ヘイ』といつたまゝ、箒を持つたなり、立竦んで了つたといふ。

（つゞく）

大阪朝日新聞初期時代吉野の花見

宇田川文海

私は若い時から出不精で、五十年大阪に住みながら、吉野へ一二度しか花見に行かない。

初度の吉野の花見

は、私が朝日新聞社に入つてから、一二年後の事のやうに想ふから、明治十四五年の春であつたらう。ある土曜日の、今や編輯を終らんとする時に、庶務課から、闕（德）岡野（武平）の兩君と私に、チョットといふ呼出しがかゝつた。何の相談かと思つて行つて見ると、社長の村山（龍平）君から『昨今吉野の花の眞盛りだといふから、今からすぐに夜道をかけて、花見に行かふと思ふ賛成したまへ』と、意外の相談。吉野の花見は、豫て希望してゐた事であるから、誰か否やのあるべき、賛成賛成大賛成と、即時に相談一決。成るべく夜の更けない中に、花に分入るやうにしたいものだ、それには宅へ歸つて仕度などしてゐては、遲八刻の虞がある。じやアこのまゝ編輯の終り次第、すぐに出掛ける事にしやうと、私共三人は二階の編輯室に歸り、大急ぎで筆を走らせて、其日の仕事を了り、後の事は夜勤の編輯員と校正の人に托して、そのまゝ二階を下りると、村山社長と、上野（理一）庶務課長は、五臺の人力車を用意して、待ち構へてゐたので、すぐにそれに飛乘つて、威勢好く出かけた。

爰でチョット斷つておくが、其時分の朝日新聞社は、創刊以後三年に成るか成らず、京町堀に社があつて、店が庶務課、二階が編輯室で、極めて狹隘なもの、庶務の一課で、會計も、販賣も、廣告の取扱ひも、何も彼もやつてゐて、庶務課長は上野理一君、其上に村山社長が居て、何も彼も兩人で賄つてゐた。